

司式: 佃 雅之
奏楽: 中井喜久子

前奏: 「我が心は喜びに満ち」 (J. ブラームス)

招詞: 神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。(1テモ 3:15b)

讃美歌 210「来る朝ごとに」

交読詩編 84:1-5

01 【指揮者によって。ギテイトに合わせて。コラの子の詩。賛歌。】

02 万軍の主よ、あなたのいますところは/どれほど愛されていることでしょう。

03 主の庭を慕って、わたしの魂は絶え入りそうです。命の神に向かって、わたしの身も心も叫びます。

04 あなたの祭壇に、鳥は住みかを作り/つばめは巢をかけて、雛を置いています。万軍の主、わたしの王、わたしの神よ。

05 いかに幸いなことでしょう/あなたの家に住むことができるなら/まして、あなたを賛美することができるなら。〔セラ

朗読聖書①ホセア書 14:5-10

05 わたしは背く彼らをいやし/喜んで彼ら愛する。まことに、わたしの怒りは彼らを離れ去った。

06 露のようにわたしはイスラエルに臨み/彼はゆりのように花咲き/レバノンの杉のように根を張る。

07 その若枝は広がり/オリーブのように美しく/レバノンの杉のように香る。

08 その陰に宿る人々は再び/妻のように育ち/ぶどうのように花咲く。彼はレバノンのぶどう酒のようにたたえられる。

09 ああエフライム/なおも、わたしを偶像と比べるのか。彼の求めにこたえ/彼を見守るのはわたしではないか。わたしは命に満ちた糸杉。あなたは、わたしによって実を結ぶ。

10 知恵ある者はこれらのことをわかまえよ。わかまえある者はそれを悟れ。主の道は正しい。神に従う者はその道に歩み/神に背く者はその道につまずく。

朗読聖書②ルカによる福音書 8:4-18

◆「種を蒔く人」のたとえ

04 大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばにきたので、イエスはたとえを用いてお話しになった。

05 「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。

06 ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。

07 ほかの種は茨の中に落ち、茨と一緒に伸びて、押しつぶされてしまった。

08 また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

◆たとえを用いて話す理由

09 弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。

10 イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、/『彼らが見ても見えず、/聞いても理解できない』/ようになるためである。」

◆「種を蒔く人」のたとえの説明

11 「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。

12 道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。

13 石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じてても、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。

14 そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快楽に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。

15 良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

◆「ともし火」のたとえ

16 「ともし火をともし、それを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。

17 隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない。

18 だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。」

祈 禱

私たちの救い主、イエス・キリストの父なる御神、あなたの聖なる御名を褒め称えます。あなたは今日も私たち一人ひとりの名を呼び、「礼拝せよ」と、教会に、またライブ配信へと集めてくださいました。肉体の疲れによって、また心が萎えて、御言葉から遠ざかろうとする私たちに目を留め、聖霊を注いでくださり、ここに集まるに足る力を、今日も与えてくださいましたことを心から感謝致します。

憐れみ深き主よ、私たちはあなたの恵みに充たされていることを知りながら、またその恵みの中で自分がどのように歩むべきかを知りながらも、不信仰であり、あなたが備えてくださった日々の中で御心を追い求めることに乏しい者です。どうか信仰弱き小さな私たちを顧みて、不信仰のゆえに曇る私たちの目を開かせてください。あなたを信頼する確かな思いを与えてください。私たちがあなたの教えを忘れることがありませんように、この一時^{ひととき}だけでなく、私たちの生活全てにおいて、あなたに感謝と賛美を献げる生活を過ごすことが出来ますように、主よ、御言葉をお語り下さい。

愛に満ち給う主よ、どうか地上にあなたの平和を来たらせてください。この世界は暴力による支配、愚かな争いを止めることが出来ずにいます。人間の罪がこの世界を覆っています。ロシアによるウクライナ侵襲は終わりが見えません。イスラエルによるガザへの武力攻撃によって、日々多くの人の血が流され続けています。主よ、あなたの愛に満ちた霊をこの世界に吹き込んでください。日本でも心の痛む出来事が絶えません。能登半島地震によって未だ困難な生活の中にあり、悲しみと不安を抱えている方が多くあります。主よ、どうか、そのお一人おひとりをあなたが顧みてくださり、慰めと励ましをお与えください。被災地から離れた私たちが少しでも被災された方々に寄り添うことが出来ますように導きをお与えください。そのためにキリストの名によって立てられた全ての教会を、あなたの恵みと希望を証しする教会として固く立たせてください。被災地にある教会・伝道所があなたに与えられた地に立って、力強く福音を語る事が出来ますように、福音を語る者、聴く者の傍らにあなたが共に居てください。

神さま、今日、この場の礼拝を共にできない私たちの家族のことを覚えて祈ります。どうかあなたが私たちの愛する友を訪ねてくださり、必要な慰めと励ましと勇気を豊かに与えてください。

私たちの主よ、地上での生涯を終え、あなたの下に旅立った姉妹たちを

御国に向かい入れてください。姉妹たちの生と死を通して、あなたが現わされた愛と神秘の福音を私たちが宣べ伝えることが出来るようにしてください。悲しみの中にあるこの群れをあなたが慰めてください。高齢のため、病のため、礼拝に集うことの出来ない者も居ります。また様々な困難な状況の中にある友、深い悲しみの中にある友、生きる力と希望を失っている友たちを、あなたの力強い御腕で支え、再び立ち上がらせてください。

主よ、今日の説教者を感謝致します。鮎川健一牧師が聖霊の導きを豊かに受けて、あなたの御国の消息を説き明かされますように。聴く私たちも聖霊に導かれ、取り次がれた御言葉が私たちの心の中に深く染み透りますように。私たちが牧者の語る言葉を受け入れ、信じ、喜び、慰められますように。御言葉によって、あなたが愛そのものであることを味わい知ることが出来るようにしてください。

これらの祈りをイエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌:54「聖霊みちびく神のことはば」

説教:「実を結ぶ人」

鮎川健一

6月の梅雨の時期を迎えて様々に思いますけれども、近年顕著な猛暑の課題が重なります。農作物や発酵を促すためには暑さ寒さも必要ですが、キリスト教会は、世論の飛び交う日々にあっても主の御心を願いつつ、真実を求めて進みます。

今朝の箇所は非常に印象深い喩え話です。おそらく当時の日常生活からあった話で、子供でも分かりやすい話とも思います。或る人が種を蒔く。この種は麦の種でしょう。当時は、農夫が手に種を掴んで、大胆に種を畑に蒔くことから、風に舞えば畑の外に出てしまうこと必須です。そこで色々な所に種が落ちるわけですが、結果的に「良い土地に落ちた種だけが百倍の実を結ぶ」という実態を踏まえての喩えです。

話の中での種は『神の言葉』です。種蒔く人は『伝道者』と考えられます。教会でこの話を聞いたとき、現実と重ねて理解しようとして、神の言葉を語っても伝道しても進展せず会員が増えない。ないない尽くしが叫ばれて、更には「神の言葉を聞かない人が悪い」という話を持ち上がります。事実、福音を聞く人の耳、心のあり様、信仰生活の問題が大きく響くことも否めません。

いずれにしても、神の言葉に対する応答は時間が掛かるのも事実です。“人によって”になりますが、神の言葉に対しての耳と心が整っている、それがどういうことか、むしろ整っていない、そちらの方に心が動くことが多いです。子供の成長、また人間の一生涯を思えば分かる気もします。どんなに懇切丁寧に説明し、事が目の前で起きていても、それが自分のことには思えない。そこから気分を害して、“もう結構だ、教会には行かない”となります。あるいは、洗礼を受けたその後で様々な困難があるのも常です。そうならば責任を自分以外のところに向けるようになります。志を受けたキリスト者が誕生し、成長するまで、どれ程の種を蒔き続ければ、一つの花が咲き、大きな実をつけるのだろうか、これは伝道者も例外ではありません。明治期以来開始された日本での伝道の姿の一面でもあるわけです。たとえ教会に人が増えても、伝道者の志願があったとしても、信仰の内実や伝道者としての志が神の思いに適わなければ、教会が教会としてあり続けることはできませんし、また伝道者としての献身を続けることが出来なくなります。信徒は信徒としてのこの世のしがらみやその他の外的な要因

によって困難を伴いますし、宣教者の多くの苦しみは、自らの説教や教会姿勢を問い続ける中で立ち続けたとしても、要らぬところで他人から揶揄され責められて、この世の務めを終える伝道者も少なくありません。どんなに信仰篤く、熱心で励んでいたとしても不必要に追いやられることも茶飯事です。

しかし主はこの場面で伝道の困難さを示されたわけではありません。主もそのことは承知のうえで、なお最も深く人々の心の頑なさを知っておられた方です。主の十字架への道筋を辿れば明らかです。種蒔きの喩えの中の「種蒔く人」とは、他でもなく主ご自身と思われまふ。神の御子であられるイエスほど神の言葉を語り続けながら、少しも実ることのない現実を味わい尽くされた方はいないでしょう。しかし主はここで、“百倍の実を結ぶ種がある”という希望を確信しておられます。主は神の言葉の力をよく知っていたからと思われまふ。神の言葉はその人の中で成長し、聞いた人の思いを超えてその人を造り変え、神の御国の完成に参与する多くの実りをもたらす。それが主の確信でした。そして事実、神の言葉は実り、全世界にキリストの教会が立ち、日本にもキリストの蒔いた種が芽生えています。確かに私たちの置かれている伝道の現実、厳しいのも確かです。しかし主と共に神の言葉の力に、より深く信頼を寄せるべきに思います。でなければ私たちは種を蒔き続けることが出来なくなります。伝道は神の御業です。だからと言って私たちが何もしなくてよいということではありません。神のなせる業、だが私たちが参与するということです。この当たり前のことを、今一度心に刻みつつ、宣教の業を内面的にも外面的にも整えられるよう祈り続けるものでしょう。

そこでこの箇所に出くわした時、私たちは自分をどの種に思うでしょうか。今までもそうでしたし、多くの場合は“自分は石の上か茨の地だ”と答えます。“道端”と答える人もほとんどいません。確かに牧師と一緒に聖書を読んで礼拝を献げていることから、“道端ではない”と言うのでしょうか。反対に、“自分は良い土地に落ち、何があっても忍耐して御言葉を心に宿し、これに従って生きることが出来る”と言い切る絶対的自信を持っている人にも、滅多に会うことはありません。夫々が問われるところです。試練にあっても身を引かないか、あるいは人生の思い煩い、富の誘惑、快楽、地位や名誉などに心を引かれ、神の思い、御言葉の真実から離れてしまうことはないかどうか。

旧約聖書には、このことを現す物語が“所狭し”と描かれています。中でも、出エジプトの旅の途中で、“腹を満たす十分な食べ物がない”と神に不平・不満をぶつけた人々がいました。彼らは、過越の出来事、海の奇蹟そして食べ物がないと不満をぶつければ天からマナを与えられ続けた人々です。“喉元過ぎれば”のように、素晴らしい神の恵みの業にも慣れてしまい、ちょっとした不安や不満に駆られると、“マナしかない。肉が食べたい。”(民 11:4-6)と言い出す。事実、神の救いの業に多く与ってながらの実態です。これはまさに、“石の上・茨の地”の典型と言えるものでしょう。そこに自分を当てはめても、なお自分が“石地”や“茨の地だ”と言い続けてしまう人には、半ばきつい一撃があります。何故なら、本当にそうなら、決して実を結ばないことになるからです。一生涯に亘って“実を結ばなくてよいのですか”と問われる姿勢です。究極的には、“全知全能なる神によって救われなくてもよいのですか”、ということにもなります。“それでも自分で生きてゆくのだと言い張るでしょうか”、と問いたくもなります。そこまでいくと大抵の場合は、“私も良い土地に”と答えるに至ります。この世の幸を求めてであっても、そう答える

ものです。

そもそも主はここで、神の言葉を聞く人には、「道端」、「石地」、「茨の地」、「良い土地」の4種類の人がいるとは断言していません。もしそうならば、「良い土地でない人はみな実を結ばない、一生救われぬ」ことになってしまいます。先ほど、成長には時間がかかることをお伝えしました。私たちは元々みな、「石地」や「茨の地」どころか「道端」だった者でしょう。私は確信しています。私自身がそうでした。神の言葉を聞いても、ちっとも判らないので忘れてしまう。心に留めることもない。また聞くことすら意識になかった、そういう人間だったのではないのでしょうか。更に振り返ってみるならば、私たちが自覚的に教会に来るようになる以前に、聖書の言葉に全く一度も触れたことはないのでしょうか。おそらく無意識にどこかで触れていた、聞いていたはず。それは聖書やキリスト教以外の別の本、これには学校時代の教科書も含まれますが、また映画や歌、周りの人々の話であったかもしれませぬ。またそれをキリスト教の言葉、ましてや神の言葉という認識で真剣に心に留めることはなかったかもしれませぬ。しかし今、私たちはこのようにして神の言葉を求め、礼拝に集っています。確かに、私たちは少しであっても変えられ続けてきているのは事実です。何かの切っ掛けがあって教会に身を置き、今では神の言葉が芽を出し、僅かながらでも私たちの中で根を張り始めている。そこまで変えられてきているはず。とするならば、礼拝者としてあり続ける志にあるならば、私たちはこれから「良い土地」へと変えられていくことを望み、期待していくに至るものでしょう。

そこで聖書が示すところでは、人には神の言葉に対して4種類の対応をする人がいるのではなく、四つの段階があるのです。主は、全ての人が「良い土地」になることを求めておられ、期待されているのです。では、この四つの土地の違いは何かです。それはただ一つです。「良い土地」は耕されているが、他の地は耕されていない、耕せないとも言切れます。そうでも畑の横の道端でも、耕そうと思えば苦労しながら続ければ「良い土地」になること。また稀にですが、手をつけたわけでもない所で小さな花や大根、ジャガイモまでもが芽を出して実ることもある道端です。タケノコが生えてきて、大変なことになることもあります。鳥が種を運んできて、そこで落ちて、自然と土がある所で芽が出る、または風に吹かれて留まったところに丁度土があったところだった、その中で生えてくる、そのようなことも日常あります。それはさておき、「耕される」とは、土が軟らかくなることをそのまま受けて、「砕かれる」ということです。“生まれつきの自分が砕かれなければならない”ということ。それほどまでに人間の心は頑な・頑固だということ。神の鋤、鋤、鎌によって、硬く固まった心が打ち砕かれ、神に向かって、神の言葉に向かって柔らかく開かれ、受け入れる心に変えられていかなければならない”ということ。では私たちの心を神に向かって造り変えていく、神の鋤、鋤、鎌とは何でしょうか。それは他でもなく『神の言葉』です。“神の言葉は「種」と同時に、鋤、鋤、鎌”です。つまり、“神の言葉を語り伝える”ことは、“神に対して頑なな心を打ち砕き、それを耕し、神の良い土地に変えていくという業”ということ。す。

伝道とは、そういう業です。伝道集会は大切ですが、一回の集会、一回の御言葉の解き明かしを聞いたからとて心が変われる程、私たちの心は素直ではありません。時間がかかります。教育を受けても、完全な人間、知識高等な人間になることは難しいことを思えば、容易に理解できます。

しかし“自分を造り変えて下さる神の御業にあって神の言葉の力を信じる者は、いとわず種を蒔き続ける”のです。なかなか実りが与えられないように思えても貫き通すのです。生涯をかけて一人の人を神の御許に連れてくるのが出来たなら、その一つであってもその人の生涯は神の御前に大きな意味を持つこととなります。ですから、数も大切でしょうけれども、内実の伴わない数では意味もなく、むしろ弊害そのものです。地道に確実に芽生える、この事を願うように、一つの種が立派に成長することを見る方が、多くの種を蒔いても実が確実にならないよりは神に喜ばれることです。伝道とは、労苦は多くとも大きな神の祝福に満ちた栄光の業に参与するものです。

使徒パウロは弟子のテモテを励まし、教会の善き働きの担い手としてあるよう願いました。そして信仰は思弁ではなく、日々の生活の鍛錬がより確かな堅固な信仰生活を歩む上で重要なことと伝えました。周囲のニセ教師や異端信仰の勢力に惑わされないためにも不可欠であり、現在でも、キリスト教会並びに信仰者は、この只中に置かれています。それはまさに「終わりの時には困難な時期が来る」(IIテモ 3:1)という時を迎えているに他なりません。キリスト教会は常に“身勝手な悪魔的教え”に立ち向かわされ、異教的な文化や思想が渦巻く世界の中で、キリストの福音を信じ、告白し、宣教しなければならぬ状況にあります。特に古代教会は、当時大手を振っていた精神思想との衝突で深刻な信仰論争を経験しなければならぬのです。現在でもこの状況は変わらないと言っても過言ではありません。

「マラナ・タ(主よ来たりませ)」、この思いを抱きつつ、主の再び来たるを待ち望んで、「目覚めていて眠っていても、主と共に生きるようになるため」(Iテサ 5:10)に、神と共にあって真理に生きる者として、十字架から復活の命へと向かわれたキリストを証しし、まことの救いをもたらしたこの福音の教えに従って歩み、宣教の業に励み続けたいと願うものです。

共に祈りを献げます。

主なる御神さま、恵みの内に“新たに生きよ”との力に押し出され感謝致します。様々な困難に立ち向かう教会の使命を共に果たせますように。信仰に固く立つ畏れと、また勇気と希望をお与えください。

力の主よ、弱く乏しき者を顧み、また様々な出来事に置かれた教会を顧み、あなたの下へと帰らせてください。あなたの導きにより善き証人として用いてください。真理の柱であり土台である生ける神の教会を強め、キリストの御体なる教会を、更にこの世に福音を告げるものとして用いてください。献げられます信仰の友の祈りに合わせ、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌:412「昔主イエスの」

献金・感謝(高橋智津子)・主の祈り

ご在天の父なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。今朝共に会堂において、またライブ配信において礼拝に与りましたことを感謝申し上げます。牧師先生を通して命の御言葉の説き明かしを戴きました。感謝申し上げます。

私どもは悲しいことが続きますと、身も心も“どうして?”と叫びたくなりますが、全ては神さまが決められること、神さまに委ね、あなたの御業を信じます。あなたの愛を信じて私どもは生きていきたいと思います。

私どもは、あなたから多くの物を戴いて生活しております。その中の一

部をあなたにお返しいたします。教会の宣教のため、御用のためにお用い下さい。

あなたが教えてくださいました主の祈りを共に祈り、一週間を始めて行きたいと思います。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 89「共にいてください」

祝福:主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたがた一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

会員消息:6/14金、内田芳子さんご逝去。葬儀 18 日(火)午後 1:30 から、当礼拝堂で執行。また、今朝早く、舟橋由美子さんご逝去。葬儀等後日発表。姉妹たちが今、御国で平安であるように、またご家族の方々に主の慰めがあるようにと祈ります。(佃牧師)

報告:(1)配布「2024 年度委員会等組織構成」の説明と訂正(訂正版配布予定)、(2)週報記載「難民・移民基金」支援献金趣意説明。

後奏:「全ては神の祝福のうちに」(M.レーガー)